

全訳



勤皇の志士・宇田淵の歌集

令和元年十二月十五日

百瀬ちどり

松本香代子

始めあらさることなく克く終あることすくなしと古人のいひしはけにさること也かしさるはたまくさる器量の人あらんにも、或はゆくりなく世を早うし、またはさしあふことのありて志をあらためなど、かにかくに有終の美を、さめむことはいと難かなるわざなるを、故従三位宇田淵翁の如きはや、此古語にかなへるひと、いはまし、おのれ翁公と相知りしはいまより二十六年のおかして、そは明治十年の夏、西南のみだれおこり聖駕西京に駐りおはしましけるほど、彼地在住の華族のうへにつきて何くれと御心をそ、がせ給ふことありけるうち、歌は各家祖先よりして世々修めこしみちなるに、維新の後これの研究を怠り、斯道頓におとろへにたるはいとくちをしきこと也、いまより後は月々歌会をまうけ、詠進せしめよとの御沙汰、時の右大臣岩倉公にくだりしかは、公いたく感激してた、ちに正風を其旅館に招かれ、今日云々のおほせごとを蒙りたれば、とほからず此会の設立をみるに至るべし、さるうへは足下斯道のしるべはさらなり、会の事よろづひきうけていたつかれよかくたのみ聞ゆる上は、ふた、ひ喙を容るべきにあらねど、此地在住乃華族には年来の習慣くさぐさの事情あることをも一わたり聞とりおかれたしとてつぶさに当時の景状をものがたられ、其中に清水谷公正・山本實政の二卿は歌文をも能くし思慮も深き人々なれば、何事もうちあけて諮詢し其異見をた、さるべく、又御身はつねに東京に在て遙に監督せらる、ことなれば、細かなることはもとより親しくみるべきにあらず、何人か代りていたつくものなくてはかなはじ、幸に桂宮御附宇田淵といふ勤厚忠實なる人あり、もと梁川星巖の門にありて儒学を修め詩を能くせしが思ふよしありて近來歌道に入り、みちの志いと篤き人なるをもて、これをして幹事の任にあたらしめなば必よく足下の指揮をあやまたず会務を整理し事、聖旨に副ひ奉ることを得べしなどねもころに示されしが、いくほどもなく西南の騷きも鎮りて世はおだやかになりぬ、さてそのあくるとしはじめて此会おこり、翁のえらびによりて会名を向陽とよばる、か、りしより後は御歌所よりはるく人を派して指導し、翁幹事としてすべての会務をとりあつかふこと二十余年間一日の如く孜孜勉々として此会の隆盛をはかられしかば、会員みな悦服して翁を尊重しけるが、をと、しの春かりそめの病にか、りて床につかれし二、日々にさしおもり医薬のしるしなくて終に世をさられしは、をしみてもなほあまりあることにこそ、疾やうくおもりゆきし比、嗣子豊四郎ぬしを枕邊によひ、こなたはふた、びたつべきも覚えなからむ、後に在し月よみ置たりし歌どもを則武正副・須川信行の二氏にあとらへて編輯せしめ、高崎大人に取捨をこひ、又序と跋とを大人と谷鉄臣翁とにねぎ聞えさて後に板二彫らせて知友にわかちおくり、子孫にも傳へよかしといひ遣されしよし、其時豊四郎ぬしよりふみしていひおこせられつるが、いまは三とせの祭も近付たればとてその原稿

をおくられたり、一わたり披きみるに年比の鍛錬いちしるく、いづれも能くと、のほりていふべきむねもなけれど、翁のこへに背かじとてしひて二三首削りてかへしやりぬ、そもく翁のことにつきてか、まほしき事いとおほかれど、すべては其学友なる谷翁の跋にゆづりて、おのれはた、翁を向陽会にす、められし岩倉贈相国の眼力の寄たがわて翁の始終一貫聖意を遵奉し、此會にいたつかれて今日の盛運に向はしめたる功績をしるして、その遺言の責をふたくこと、はなしぬ

明治三十六年十一月葉山なる恩波閣にてしるす

正三位 正風

春歌

歳旦天象

たちかへる年のあしたの初日影 くもらぬみ代をそらにしるかな

新年雪

枝たわにつもるもうれし雪みんと たてつる門の松ならねとも

新年祝

君か代をうたふ聲のみ聞こゆなり みやこもひなも年をおかへて

年のはじめにあつまりて酒のむといふことを

おもふとちけふのうたげをはじめにて 花にもくまむ春のさかづき

早梅

わかやどのとしの初をとふ人に みせばやおもふ梅さきにけり

春到管絃中

いと竹のしらべにこそはかよひけれ またうぐひすもしらぬはる風

春生人意中

花とりの色ねもまたで時めくは 春たつけふのころなりけり

陽春布流

みねの松のべの小草もおしなべて もれぬは春のめぐみなりけり

遠村霞

賤かすむかきねの梅もにほふらん かすみ初たる遠のやまもと

早鶯

春きぬとつぐるも人のしらざらん あまりにはやきうぐいすのころ

朝鶯

ころして朝戸はあけよ軒ちかき 梅のほつえにうぐいすのなく

朝聞鶯聲

うぐいすの聲をまくらに聞なれて 朝いのところ春はのどけき

行路鶯

鶯のころのたえまもなかりけり 花よりはなに つくやま路は

雪中探梅

さきそめし梅もやあると雪折の たけの下みちくゞりてぞゆく

梅始開

うれしくもさきつる梅がごぞの春 わかれし友にあふこちして

挿頭梅

なかくに老はかくさで梅の花 かざすかしらの雪と見えつゝ

梅花誰家

すむやだれ雪かとばかりさく梅の 花にこもれる岡のひとつ家

行路柳

くれなゐのすそひく道に打はへて にはふ花田のいとやなぎ哉

餘寒

ふきわたるかも川かぜさえぐて、春ともわかず千鳥なくなり

山里若草

春もなほ人めはかれし山里の かきねの小草青みそめけり

霞中春雨

草も木もぬるゝをみれば立こめし 野べのかすみや雨となりけむ

都春月 賜題

影かすむみやこの春ぞあはれなる 柳さくらの中そらのつき

野春駒

うちかすむ野川の水をへだてにて 友よびかはす春のわかこま

野雲雀

すゞなさくすさかの野べはみやこ人 ひばりきくべきところ也けり

彼岸桜

これやこの春のみのりの花さくら かのきし近くなりて咲らむ

花初開

ちりやすき花とおもへば山さくら さきそめし日をさかりとやみむ

名所花

しみたてるまつにまじりて畝火山 ひと木のはなも神さびにけり

静對花

しづかなるころにみれば山さくら さかりみじかき花としもなし

隔水見花

咲づくつみの花は河水の こなたよりこそ見るべかりけれ

花留人

はこねやまむかしのせきのそれならで 花にとまる春の旅人

花下言志

さくはなのかくはしき名を残さまじ からは木かげのつちとなるとも

花下忘帰

あくがるゝ花の下ふしよころへて 夢さへ家にかへらざりけり

春江花月夜

おしてゐるやなには堀江の月もみつ さくらのみやの花にくらして

月前落花

おほろよの月猶寒き こちして 雪かとばかりちるさくらかな

雨中藤

春日山まつ葉けぶりふる雨の しづくもにほふ藤なみのはな

春田家

小山田の苗代どきになりぬらむ かきねのさくらちり初にけり

春鶴

もも千鳥むれてさへづる春のの みそらにたかき鶴のひと聲

春車

しづかひくちから車のなかりせば ひと日によもの花をみましや

夏歌

田家首夏

ほどぎすきにし日より立そめぬ やまだの庵のむぎの秋かぜ

夏の初つかだ瓢亭に遊びて

わかみどりしげれる庭の木かくれに ひとりさやけき水のおとかな

若楓

若葉さす庭のかへでのうすもえぎ 小雨にぬるいろのすゞしさ

山路郭公

おきそやまたこえくれは郭公 雲ある谷のそこになくなり

山寺郭公

御佛に何のねがひかかけつらむ をちかへりなく山ほとぎす

梅実漸黄

さみだれは近づきぬらむ梅のみも 青葉かくれにきばみ初たる

梔子花

いろ香なき言の葉草にくらぶれば いはぬもよしや口なしの花

新暑

雨はれし木のまの日影夏めきて あつさおぼゆるこの朝けかな

刈麦

小やまだの麦かる賤やいそぐらむ 早苗とるべき日もちかくして

梅雨晴

さみだれの名残の露の玉ぎに 匂ふゆふ日のかげもめづらし

夏月

わか竹のひまもる月の影みれば 風なきよはもすゞしかりけり

水田夏月

千町田にてる影すゞしきのふけふ うゑし早苗のみしかよの月

閑居夏月

くひなのみよすがらたくく柴の戸に さし入月をひとりみるかな

深更堂

よひにみし月は入江のあしの葉に かくれぬ影はほたるなりけり

行路堂

夕立の雨のなごりのぬかり道 ひかりもぬれてとぶほたるかな

雨中堂

雨くらしき松の木のままにたゞひとつ ほのめくかげはほたるなりけり

苦蚊

いぶせくもあつきよごことに立そひぬ 賤がふせやの軒のかばしら

隣村蚊遣火

黒谷のまつには月のすみながら かやりにくもるしら川のむら

氷室

足引のやまには遠き市中も いまはひむろのあるよなりけり

苦熱

雪のやま氷のうみもあるものを てる日になやむみをいかにせん

来客夏稀

夏の日のあつきさかりはなかくに とひこぬ人もころありけり

夕立晴

ひるねする夢のまくらに音たて、 さむればはる、 夕立のあめ

林蟬

ふくる夜のかたやまはやし風たえて 月にすゞしきせみのひと聲

扇

手もすまにならす扇は秋立て すてんものともおもはざりけり

扇風秋近

いとはやもあふぎのつまにかよひけり 荻だにしらぬ秋のはつかぜ

松下泉

日をそふるかげだにあるをむすぶてに　あまりて涼し松の下みつ

深山泉

世は夏になれるもしらでおく山の　いはねのしみづひとりすむらん

瀧邊風

音羽やますゞしきおとを松風に　よりあはせたる瀧のしらいと

疏水のながれに舟をうかべて人々とゞもに

すゞみしけるをり

岡ざきの川風すゞしみなれ棹　さすにまかせてこのよあかさん

晩夏露

いと早も涼しき露のおきそめぬ　秋をとりの草のまかきに

夏雲

夕立の雨ともならであつさのみ　そらにかさなる雲のいろかな

夏暁

花はちすさき初しよりあかほしの　ひかりあふがぬ暁もなし

夏夜短

夏のよをみじかしのみ恨みしは　ものおもひなきむかしなりけり

夏菊

百草のはなのとちめときづるを　折たがへたる夏菊くのはな

夏船

堀江川すゞみがてらのつり舟も　数そふ夏になりにけるかな

夏枕

まつかねも岩ねもあれど夏川の　きよきなかれを枕にはせむ

秋歌

旅宿秋来

みやこにもけふ立ぬらん秋風を ひとりたびねの枕にぞきく

初秋風

そよとふく荻の上葉の秋風も 物おもふ人のみにはしむらむ

行路薄

なかくにわけこそまよへ東より 西よりまねく野路のをすゝき

朝蟲

朝露のひかり見えゆく草村の むしの音にこそ夜は残りけれ

閑庭蟲

人とはぬかきねは草にうづもれて 露のひるまもむしぞなくなる

鈴蟲

神楽岡ふりいてなく聲きけば とはでもむしの名こそしらるれ

霧深

あたごやまのぼりてみれば丹波路の きりの海こそはてなかりけれ

野分

ふきあるのはきの風ぞ心なき よはとみ草の花のさかりを

鷹未来

秋の田はいろつきぬれと初かりの わづかなるねもいまだきこえず

山家月

柿の実の梢にのこるかすみえて 軒ばのやまの月のさやけき

曉月 賜題

よひのまの月をあはれとながめしは この暁をしらぬなりけり

波間月

あらいその波にゆらるゝ影ぞとも そらゆく月のしらすかほなる

月無古今

いまでも猶かはらぬ友とみる月は、幾よの秋をてらしきぬらむ

月前松風

てる月のかゞみにちりもすゑしとや やすがら松の風はふくらん

月下懐遠征

武士のそでにも影のやどるらむ とらふすのべの秋のよの月

晚擣衣

鳥のねにおどろかさされて賤のめが またうちしきる砧なるらむ

菊花第一

いろも香も上こそなけれ大君の しるしとなれるしら菊花

節後菊

よの秋におくれし花をいかにせん われもとをかの菊のひと本

尋紅葉

むらしぐれそむる梢をたづねみん われもけふよりやまめぐりして

潤庭紅葉

たかを山たにの梢のむらもみぢ 深くもみゆるあきのいろかな

和泉の国なる牛瀧の紅葉見にまかりてよめりし歌の中に

かつらぎや高まの山のみねつゞき くもまにみゆる木々のもみぢ葉

蔦紅葉

はふつたのもみぢしぬれはころなき 谷のいはほも秋をしるらむ

栗

あすはとておきてひろはんよあらしの 落とすもうれし庭のさゝ栗

柿

たゞひとつのこゝろ梢のかきの実を あさりあらしふむらからすかな

山家秋

山里は秋ぞにぎはふ紅葉かり 木の子かりにとひとのとひきて

三井高朗ぬしにまねかれて西加茂山のたけかりに

ものしけるをりに

菊ならぬやま路の秋の香をとめて あそぶも千代の松のしたかげ

暮秋田

小山田の落ぼをひろふ賤のめら そでにさけなる秋のくれかな

秋興 賜題

ひがしやま萩のあそびもとき過ぬ いぎにし山のもみぢかりせむ

秋蝶

うかれけむ春の夢の、あととめて 尾花がすゑにとぶ小蝶かな

秋扇

秋かぜをまねきしおのがとがならん けふすてらるゝねやの扇は

冬歌

初冬霜

かきよせし庭の落葉の上へのみ けさめづらしくみゆるはつ霜

初冬紅葉

しぐれふる野やまに匂ふもみぢ葉は 秋におくれしいろとしもなし

暁時雨

あけぬとてみねにわかれし横雲の またたちかへりふるしぐれかな

月前時雨

月かげはくもらぬそらのいづこより 風のさそへるしぐれなるらん

初霜

小車のあとなかりせば橋の上におくともみえしけさのはつ霜

寒樹積年

岡のへにいくよふる木の槻ならん 冬かれなからたかき梢は

氷初結

あはたやま朝かぜ寒みしら川の 浅せの水はこほりそめけり

諸羽寒月 疎水線路八景の一

くまとみしもろはの森も冬かれて 河のせしろくさゆる月かな

破林霜後月

霜かれのかた山はやし月さえて やどるからすの数もみえけり

衾

かさねてもかさねてもなお老がみの ひとりふすまはさえまさりつゝ

川千鳥

あはたやますそのまつ月さえて 岡崎川に千鳥なくなり

水鳥多

もみぢ葉のかげにまじりてきのふけふ 青葉数そふ池の水とり

霰

夕しぐれふるやの軒のさきのはの しろきをみればみぞれなりけり

晴雪落長松

朝日影きらめく松の梢より をりく庭におつるしらゆき

雪中鳥

山里はゆきにとひくる人もなし うゑたる鳥の聲ばかりして

名所雪

さをしかのあとだにみえず春日山 もりのした道雪ふかくして

爐火

朝寒みわれよりさきにから猫のひとりしめたるまどの埋火

墟邊述懐

老ぬれば友こそなけれ埋火の ものころをだれにかたらん

山階宮の年わすれの御宴に陪し奉りて

玉つばきさかゆく君がかげにみて 八千代の末もとしわすれせん

歳暮近

あらたまのとしのをはりのひと月も いまは半をすぎにけるかな

歳暮

大そらの雲の立おもおのづから ひまなくみゆるとしのくれかな

冬山家

雪ふかき山里人の手すさみは ほだはたくより外なかりけり

冬旅

かぜ寒みかへりみすれば越きつる 山にはしらく雪ふりにけり

冬祝

たみ草の冬かれしらぬみやことて よるもにぎはふ年の市かな

雑歌

風

をりくのあはれをこめて吹からに いろなきかぜもみにはしむらむ

暮山松風

うき雲をはらふもうれし夕まぐれ 月まつ山のみねのまつかぜ

朝

けふひと日なにはのこのなくもがな あしたしづけきこゝろながらに

富士の歌よみける中に

富士川の岩ほゆすりて立浪や 高ねの雪のしづくなるらむ

東山

かも川の清きながれをそへてこそ ひむがし山はみるべかりけれ

山影映水

はやせ川ながるゝ水のそこにしも うごかぬ山のかげはみえけり

嵯峨野

君が代はさが野のおくもにぎはひて かくれすむべき山かげもなし

海邨

おほくぢらとりえし船のかへりきて 濱のむら人こゑとよむなり

屋

わかやど、おもへばうれし露のみを おくばかりなるくさのいほりも

垣

なかくにちかき隣の中にこそ へだつるかきはあるべかりけれ

隣

ならひすむそのしたしきは垣こしに 酒さへおくるをりもありけり

故郷水

野となりし草のはかくれ音すなり　これやむかしの庭のやり水

山家

世をいとふわがみならねどしばらくは　すみてもみたき山かげの庵

山家橋

のがれすむみやまの庵もとふ人の　ためとやかけし谷のいた橋

香川景之ぬしが洋行するを送りて

末遠き国のひかりはたつぬとも　わか日のもとなわすれそ

小出繁ぬしが東にかへるを送るとてみほ樹なる清輝楼にまどおしけるをりに

かへりゆく君におくらでくやしきは　この山川のけしきなりけり

ものへゆく人にたきものをつかはすとて

そらたきのかをりばかりもとゞめなん　立わかれゆく君がたもとに

釋松

かりそめにふた葉の松もうゑてみむ　千年をねがふわがみならねど

古松

あはれわがわかゝりしよをしるものは　軒ばのまつのお木なりけり

松實

いはほにも根さしきだめん山松の　千年のたねは風やまくらむ

巖

ますらをがおもひいる矢にあたりては　いはほもかたきものならめやは

幽径苔

人しれぬはやしかくれのほそ道も　苔の花さく時はありけり

橋苔

柴人のゆきゝもたえてむす苔の　あをみわたれる谷の板橋

菱

みさひ江のひしの浮葉の中わけて かよひし舟のあとはみえけり

晚鴉

けふの日もむなしく、れて山からす ねぐらにかへる聲きこゆなり

虎

すむときく竹の葉山のおくならで 市にもとらのあるよなりけり

原兎

おほそらに友もありとやす、き原 月にうさぎのうかれいつらむ

馬

雲みにもかけりしこまの老ぬれば つながれてのみよをやすくらむ

狐

かはごろもきつねも聲のかなしきは おのがよ寒やふせぎかぬらむ

猫

あて人のめぐみになれてからねこの ねふるしとねも錦なりけり

鯉

瀧つせをのぼりしとも、あるものを み艸かくれのみをいかにせむ

蜘蛛

さゝがにのいとなむわぎのたくみには かけてもおよぶものなかりけり

読書

ひとりみてひもとくふみのたのしきは 老て後こそいやまさりけれ

読書楽

月花のあそびもあれどよの中に ふみよむばかりたのしきはなし

寄書言志

老ぬれどまだみぬふみのかずくを おもへばをしき命なりけり

一弦琴をきゝて

かきならすしらべをきけばひとすぢの 糸にもちゞの聲はありけり

煙草

けふりくさくゆらすときぞ中くに おねはしり火もきえんとすらむ

看劔

たゝかひのにはをもみぢに染つらん 秋のしもこそいまも寒けれ

慶応四年東山道総督の参謀仰付られける時

おのれが携へし薙刀を

きそ山の雪ふみわけしそのかみは 杖となしつる薙刀ぞこれ

古銭

これやこの音にきゝつるなめりかは ひろひしあしの一葉なるらむ

對鏡知身老

いつのまにかくまで老をますかゞみ うつるはおのがかけとしもなし

眼鏡

老のめのかすみははれてをちかたの 花もかゞみにうつしてぞみる

冠

位やまその人ならでかうふりを いたゞく猴もあるよなりけり

窓燈

あはれわがふみよみ初しむかしより よなくむかふまどのともし火

紙

すき出しかみの上にもみゆるかな うすくなりゆく人のこゝろは

墨

ときはなる松はけぶりとなりてだに 千世もかはらぬいろをみすらむ

錦

なべてよの人にめだ、ぬうす衣の 下に、しきはきるべかりけり

弘法大師

もろこしの佛の法にとりそへて 筆のをしへもつたへ来にけむ

紫式部

いたづらに風はさそへどむらさきの このひともとはなびかざりけり

大納言経信

大み川きみがみゆきのをり越えて 一人やみつの船にのりけむ

西行法師

こゝのやまかしこの野へに庵しめて にごれる世にもすみぞめのそで

畠山重忠

たぐひなき君がこゝろの大木戸は 人のゆくてをとゞめざりけり

児島高德

とゞむべきそのみ車のすき坂を すきしはいかにくやしかりけむ

豊公

外国の草木もなべてなびくらむ この大み代に君しいまさば

小野通女

たえはてむいもせの中もなさけある きみが言葉やつなぎとめけむ

千利休

松かぜのおとにこゝろをすましけむ いまはの際もつねにかはらず

山田長政

外国のこきしとなりしますすらをも 猶日のもとやわすれざりけむ

大石良雄

もろ人のはやるこゝろもおほ石の おししづめてやをりをまちけむ

達磨

世をうみもやすくや君はわたりけむ 一葉のあしのかぜのまにく

老人

老ぬとてなげきし人の言の葉も わがみにしたくなりけるかな

貧女

賤のめがおのがつゞりはさしもせで 誰か為にぬふ衣なるらむ

市中隠士

白くものたな引山とみてやすむ くれなみふかき塵のちまたも

隠士出山

ながれてはうきよのちりにまじるらむ 山下水のきよきこゝろも

野寺僧帰

夕からすねにゆく歌も法の師の かへる野寺のはやしなりけり

池塘行客

水清きいけの塘をゆく人の かげさかしまにうつりけるかな

樵夫

山さともすめばみやこのこゝちして なげきたるとはおもはざるらん

大原女

わがせこがこりし妻木を朝なく はこぶもうれし花の都に

遊女

おのがみのいつはり多き心もて 人のまことをなにねがふらむ

乞児

もろ人のめぐみにつなぐ玉の緒も たえよとのみはおもはざるらん

眼

しつむらん人もこそあれたをやめが 目にたゝへたる秋の波間に

口

わぎはひの出入がごとく聞からに たやすく口はひらかざらん

心

天地のかみやまきけむ言の葉の 種ともならん人のこゝろは

夢談故人

かたらひしその言の葉はさだかにも 耳にのこりてさめし夢哉

道

みちといふ道はまことのひとすぢを 心つからやふみまよふらん

忙

ことわぎのしげきになれし老がみは いそがはしとも思はざりけり

思君恩

天地の外にたとへんものもなし わか大君のおほきめぐみは

都踊

これもまた柳さくらをこきませし 都の春のにしきとぞみる

加茂祭御再考ありけるをりに

(明治一七年)

いのちあれはふたゝびけふにあふひ草 かけてぞいのる君が八千代を

王政復古

かし原のかしこきみ代のおかしにも かへすや神のこゝろなるらん

演劇

わぎをきのそのそらなきをみる人の ながす涙はまことなりけり

相撲

御位のあらそひもなき君かよは 心のどかにみるすまひかな

主殿権助に任せられしをりに

(明治一九年)

けふよりはにしの都のとのもりと なりてぞまたん君が御幸を

惜寸陰

いたづらにおもひなすぎぞ時のまの　ときもえがたき寶なりけり

社頭祈世

神路やまかみのみしめの一すぢに　かけてぞいのる君が八千代を

愛国

外国のふみよむ人もしき嶋の　やまところはかはらざらん

夜学

ことわざのしげきもしばしわすられて　ふみよむよはぞわがよなりける

つかへをやめける時よめる　（明治二八年）

とし月の重荷おろしてけふよりは　野飼の牛のみこそやすけれ

男山祭

いく度かわけのほりけむ男山　神の御幸をおくりむかへて

としごとに此御祭の奉行つかへまつりければかくはよめるなり

ほ、つき

をとめ子がつぼみの花のくちびるに　吹ならつらん草の実ぞこれ

亡友山田翠雨が詩抄のはしに一言をとその妻淳子がこひけるに

ゆたかなる秋こそみゆれ小山田の　稲のぬきほのわづかながらに

うれきしもの

日数へてかへる丹路の梅ごしに　けふみえ初しふるさとのやま

伐木聲

雲かゝるまつも薪となりぬべし　たかねに斧の音ぞきこゆる

蓬莱山といふことを

仙人のこゝろのおくの海よりや　よもぎがしまはなりいでにけむ

清少納言がすだれか、けたるかた

玉すだれか、げし雪の世、越へて　きえぬは君が名にこそありけれ

三条相國の追悼に春後思花といふことを
（三条実美 明治二四年没）
ちりはてし花を惜とや鶯も 青葉かくれに音をのみぞなく

伊東裕命ぬしの追悼に秋露といふことを
なき人のことの葉草にかゝるらん そでにあまれる秋のゆふ露

加茂季鷹翁五十年の追悼に對月懷舊といふことを
かも山の月はむかしの秋ながら 影もとゞめずなりし君かな

中村良顕ぬしかみまかりけるをり秋哀傷といふことを
なにはかたあしべのたづの聲たえて うらさびしくもなれる秋かな

香川景樹翁の追悼に花間鶯といふことを
さく花のさかりになれば鶯も 聲にこゝろをつくしてぞなく

拝郷蓮茵翁の追悼に梅といふことを
袖ふれし人こそみえねいまも猶 かをりゆかしき梅の花園

大勲位晃親王の御追悼に春月香といふことを
君まさぬ春とおもへばおぼろよの 月もさびしきにしこりの里

名古屋にて同親王の御追悼献詠会催しける時寄松懷舊といふことを
山しなの石田の小野のこまつはら み袖ふれしもむかしなりけり

小早川隆景卿の三百年祭の影供に川郭公といふことを
ありしよのこゝろつくしをおもひ川 水かみ遠くなくほととぎす

石井光子の追悼に水邊夏月といふことを
なきあともすゞしくみえて山寺の 庭の清水にやどる月かげ

招魂祭の手向に懷舊といふことを
君がよのさかゆくみればもろ人の すてしいのちのかひはありけり

遍照僧正の千年忌によみて手向ける
花のやまくものはやしの道わけて 君がむかしのあとやたづねん

俊寛僧都の建碑式によみて手向ける

なきたまもいまは都にかへりこむ 君がしるしの石ふみぞこれ

三條故内府公のみたま、つりしけるをりによみて手向ける
うごきなきすめら美國のふとはしら たてしいさを、あふがざらめや

清水完和翁の十年祭に山家水といふことを

世はなれてひとりこゝろをすましけん おもかげうかぶ山の井の水

先師梁川星巖先生の三十年の忌辰によみて手向ける

三十年のありしむかしにかはりつる この大み代を君にみせばや
からうたにかへてぞけふは手向まし わがしき嶋の大和言の葉

同翁へ贈位のみことのりありけるをり奉告祭によみて手向ける

露ふかきこけの下にも位やま のぼるとしらばうれしかるらん

頼山陽先生に贈位のみことのりありければ

位やまのぼるをみればふみの上に たてしいさをの高くもあるかな

月照上人の三十三回忌の追悼に寄海懷舊といふことを

わたつみのそこ尋てや入にけむ みをかくすべき山もなきよに

小澤蘆庵翁の追悼会に山家雲といふことを

しらくものゆき、をひとりながめけん 世をうづまさの山すまひして

立入宗継卿の建碑奉告祭によみて手向ける

君がためたてしいさをのうもれめや この名ふみの朽ぬかぎりは

丈山翁の祥忌に詩仙堂にまとみして夏懷舊といふことを

いまも猶すぎしむかしをしのび音に なくや軒ばの山ほとゝぎす

松下見林翁の墓の年経てしれせざりしがあらはれたりとて内野の大雄
寺にて法のわざいとなみけるをりよめる

みさゝぎに心つくし、うま人の そのおくつきも世にしられけり

明治三十四年四月なかば重き病にかゝりこゝち死ぬべうおぼえけるを
りかしこき仰ことうけたまはりて
死出のやまわけゆくにもわすれぬぞ わが大君のめぐみなりけり

東宮のみこの御成婚を賀し奉りて
梓弓はるのみやまのみねたかく いづる月日を誰かあふがぬ

某の六十の賀に鶯有歎聲といふことを
うぐひすの千代のはつねはみどり子の 昔にかへる君ぞきくらむ

三輪貞信が 内の御会始に雪埋松といふ御題にて奉りける歌の撰歌に
なりしをことほぎて
雪ふかくうづみし松の言の葉も 世にはかくれずなりにけるかな

七十になりける年のはじめに
古もまれなる人となりにけり けふあたらしきとしをむかへて

寄海祝

あらうみのなみの中にもうごかぬは とよあし原の根さし成けり

故従三位宇田翁の歌集なりぬ、これ書清めてよと豊四郎ぬしの乞は
るゝに、おのれは向陽会よりのちなみも浅からねば、拙き筆をかへ
りみず、かくはものしつ

明治三十七年三月 正四位男爵藤枝雅之

後序

栗園宇田君遺稿和歌一卷曰栗花兼刻
將成其嗣豊四郎来曰囑序跋於先生
及高崎男先人所遺命也請諾焉予曰
予非知歌者宇田君何有託囑既而日此
豈有待一言捨知己乎予與君相知伊四
十餘年矣其始相見問其所修君曰記誦
詞章之学非吾所好而溫柔敦厚之教
則吾所不忽吾嘗從星巖梁翁傳王学
旁究詩賦予拍掌曰獲我心哉獲我心
哉是兩心投合不啻謬添上下議論
協訂聲津期以振大雅正風俗矣居数
年君断然廢詩自焚其稿與高崎男
正風等專攻和歌其意謂漢詩在彼則
有聲韻感人者而在我則侏離不易入
耳雖巧過李杜亦何益哉若夫萬
葉古今則我之詩賦而人丸貫之則我
之李杜已君將記我之詩賦也且夫近
世世界交通博矣果曰學外國詩則歐
米各國之詩亦不可不攻豈唯漢詩而止哉
吾則且用我歌以發揚我國人之性情而
鼓吹聖世之休明也耳予既聞其說
又誦其歌乃嘆曰嗚乎此雖君餘事亦
足以窺其致已知之功其及集成乃書
前歌置諸卷後若者評贊歌詞則有
高崎男序文在焉

明治三十七年三月

谷鉄臣撰并書

(印) (印)

(奥付)

明治参拾七年四月十五日 印刷
同年 同月十九日 発行

編集兼 宇田豊四郎

発行者 京都市上京区聖護院町
七番地

印刷兼 山本彦兵衛

製本者 京都市上京区寺町通御池上ル
上本能寺町六番地